

## 『中央新聞』掲載の推定・永代美知代作品「老嬢の告白」

—付 岡田（永代）美知代著作リスト—

有元伸子

### はじめに

岡田（永代）美知代（明18〜昭43）は、広島県上下町出身の小説家、翻訳家である。田山花袋門下の自然主義作家として小説を発表するとともに、明治末から大正期を通じて多くの少女小説・童話を書いた。著書としては、花にまつわる古今東西の挿話を編集した「花ものがたり」（大6）や、翻訳「奴隷トム」（大12、ストウ夫人「アंकフルトムスケピン」）などがある。

論者は、美知代を、田山花袋「蒲団」（『新小説』明40・9）のモデルとしてのバイヤスから解き放ち、等身大の女性作家として再評価すべきだと考えている。花袋との関係にしても、従来は、花袋の発言に即して美知代が見られてきたが、美知代の書き物に目配りしながらとらえ直すことが必要であろう。そうした研究態度によって、花袋研究も進展し、近代女性作家の形成過程の解明の一助ともなるはずである。その前提として、美知代の年譜の未解明な部分を埋めるとともに、著作リストを作成することが最も重要である。このような目論見のもと、論者は、研究の基礎として必須の著作リストを昨年度に作成・公開した（注1②）。さらに本年度の調査で確認した作品を加えた改訂版の著作リストを本稿の末尾に掲げている。

その著作調査の過程で、明治四二年（一九〇九）の『中央新聞』（国立国会図書館蔵）に、美知代作と推定される無署名の連載小説を発見

した。「老嬢の告白」（明治四二年六月一三日〜八月一日）と「女子大学英语科出身 新夫人の打明話」（明治四二年一〇月六日〜十一月七日）の二作品である。このうち、本稿では「老嬢の告白」を紹介する。「新夫人の打明話」については、別稿で紹介できる予定である。作品本文は、量的な事情により、全文を本誌に掲載することは叶わない。このため、著作権継承者の許可を得て、「広島大学学術情報リポジトリ」（H i R）に作品の新聞版面を登録・公開した。左記の本論文掲載ページに張られたリンクから、PDFファイルで閲覧可能である。（または、「広島大学学術情報リポジトリ」（H i R）のトップページ検索窓に、「中央新聞」「老嬢の告白」などの本稿のキーワードを入力しても可）。併せてご参照いただきたい。

<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00033923>

### 一 明治四二年の美知代と『中央新聞』

作品を紹介する前に、明治四二年（一九〇九）年の美知代の状況や『中央新聞』との関係を概括しておく。

(a) 明治四二年当時の永代美知代

岡田美知代は、神戸女学院在学中の明治三六年夏に、田山花袋に入

門志願の手紙を送り、許されて、翌年、学院を中退して上京。明治三八年、体調不良で帰郷していた美知代は、七月下旬に関西学院で開かれた神戸教会の夏期学校で、かねて聞き知っていた同志社の学生・永代静雄と対面。九月、上京の途次に永代と落ち合つて、膳所などを遊覧。それが発覚し、また静雄が上京したこともあり、花袋と実家によつて善後策が相談され、翌三九年一月、上京した父に連れられて美知代は上下町に帰郷した。帰郷後の美知代は、精力的に青年雑誌に作品を投稿し、共通の友人・中山三郎を介して静雄の消息を知るとともに、花袋とも手紙を交換していた。その花袋が、明治四〇年九月、『小説』に小説「蒲団」を発表し、美知代はスキヤングルの渦中に投げ込まれる。

花袋は「蒲団」発表の贖罪のごとく美知代の両親と交渉を続け、翌四一年四月、美知代は二年三月ぶりに再上京し、英語学者の兄・実磨宅（白山御殿町）に住まった。九月、美知代は静雄の子を妊娠して兄の家を出奔、千葉県九十九里に隠れ住んだ。静雄は、早稲田大学を中退後、旅行新聞社に勤務のかたわら、須磨子の名で『不思議の国のアリス』の翻訳「アリス物語」を『少女の友』に連載中であつた。美知代は一二月に帰京して、永代静雄と牛込区原町で同居。ここに中山三郎も居候していた。

翌明治四一年一月、実家が激怒したため、美知代は形式的に田山家の養女となり、永代静雄との結婚披露の通知状を出す。三月二〇日に長女・千鶴子を出産。これ以降、美知代は『永代美知代』名で作品を発表するようになる。永代は、旅行新聞社から『東京毎日新聞』を経て、春ごろから『中央新聞』に移籍した。当時は新聞社を渡り歩く記者は珍しくなつたのである。『中央新聞』が紙面刷新のため、小野瀬不二人を招聘、早稲田出身者が大量入社しており、七月には若山牧水も入社している。

この頃から美知代と静雄の夫婦仲が悪化し、一月に破局。無署名で『中央新聞』に連載され、美知代作と推定される「女子大学英文科

出身 新夫人の打明話」は、フィクションながらこの夫婦間の葛藤を妻の視点で描いており、貴重である。美知代は千鶴子をつれて田山家に戻り、その後、花袋の内弟子となつていた服部貞子（水野仙子）と、代々木初台の家で共同生活を始める。一二月二〇日ごろ、社内路線争いによつて、小野瀬不二人がひきいる早稲田派がいつせいに退社し、静雄や牧水も辞職した。本稿で、美知代作だと推定して紹介する「老嬢の告白」は、静雄の在職期間中の明治四二年六月〜八月に『中央新聞』に掲載された作品である。

その後についても、簡単に触れておく。美知代は、翌明治四三年、長女・千鶴子を、花袋の妻りさの兄で花袋の文学上の友人でもあつた太田玉茗の養女として入籍。千鶴子と水野仙子とともに、二月に仙子の故郷福島県の飯坂温泉で一カ月暮らし、三月に太田玉茗が住職をつとめる建福寺（埼玉県羽生）に一カ月滞在して千鶴子を慣らしたあと、千鶴子を置いて東京に戻つた。四月、美知代は仙子と暮らす代々木初台の家を出て、静雄と復縁し、『富山日報』の記者となつた静雄と共に富山に移つた。

花袋は、「縁」（毎日電報）明治四三年三月〜八月）において、「蒲団」発表以後の美知代の再上京・妊娠と静雄との結婚・出産・別居・子との別れ・静雄との復縁にいたる一連の状況を作品化している。美知代の「ある女の手紙」（『スバル』明治四三年九月）、「里子」（同、同年一〇月）、「岡澤の家」（『ホト、ギス』同年一二月）などは、花袋の「縁」に対抗する形で発表された。ほかにも、「一銭銅貨」（『中央公論』同年一二月）、「清のぐるり」（『ホト、ギス』四四年四月）など、美知代の自然主義小説家としての代表作は、この富山時代に執筆されている。今回の調査では、新たに『富山日報』でも美知代の作品が確認できた。本稿で紹介する「中央新聞」とあわせ、美知代は、夫の静雄の赴任先の新聞に作品を発表していることが明瞭になつたが、『富山日報』掲載作品については稿を改めて紹介したい。

## (b) 掲載紙『中央新聞』の概略

つづいて、永代静雄が明治四二年春ごろから同年一二月下旬まで勤務していた「中央新聞」の概略を確認しておこう。

明治一六年に創刊した改進黨系の「絵入朝野新聞」が明治二二年に「江戸新聞」となり、それを明治二三年に大岡育造が買収して「東京中央新聞」と改め、さらに翌年「中央新聞」と改題した<sup>4</sup>。明治四三年に政友会員の合資会社となり、政友会の機関紙となった。その後、昭和一五年に政友会の手を離れて、「日本産業報国新聞」となり、戦争末期の昭和一九年に廃刊した。

永代静雄が在職した明治四二年は、政友会の機関紙になる前年で、大岡育造社長経営時代の最後に相当する。この当時の「中央新聞」の発行部数は、三〇五万部。「報知新聞」の一四二〇万部、「東京朝日新聞」の八〇一〇万部などより少ないが、「読売新聞」の一・五〇三万部、「日本新聞」「東京毎日新聞」などの一〇二万部よりは多く、東京発行の新聞のなかでは中堅と見なしてよからう(注4③④)。

山本武利は、東京紙の市場構造を《下町型》と《山手型》とに分けると、「都」「報知」「時事」「中央」などが下町型、「万朝報」「日本」「読売」「国民」などが山手型だと述べる(注4③)。さらに山本が紹介している明治四三年の「新聞売子の見たる新聞観」(「新公論」明治四三年六月)によれば、「中央新聞」は、《下谷、浅草、本所、深川方面》で売れ、購読者の階級としては《労働者》だという。

また、日露戦後から明治四三年までの「中央新聞」の動きについて、西田長壽は次のように解説する(注4②)。

《日露戦争を通して、とくに日露講和条件に対する各社の態度によって、紙数の増減は著しかった。

概して桂のご用新聞といわれた、「国民新聞」、「やまと新聞」、「中央新聞」などは、一時非常に発行部数が減少した。》

《「中央新聞」も、日露戦後の講和問題で政府の立場を擁護したために声価を落した新聞の一つであった。大岡育造は、明治四

十二年四月、もと「二六」にいた小野瀬不二人を主幹兼編集長に起用して、紙面改良に当らせたが、社の古参幹部水田南陽等と意見が合わず、小野瀬は同年末早くも退社した。大岡は社を政友会に譲渡することとし、四十三年五月、組織を政友会員二八名の合資組織となし、社長鶴原定吉、理事高橋光威、吉植庄一郎として名実ともに政友会機関紙とした。同年中に夕刊を発行、社業もようやく軌道にのった。》

日露戦争で新聞界の活躍はめざましかったが、戦後に平和条約が締結され一段落つくと新聞読者が半減する。このため、各社の間で《猛烈な読者獲得競争》がおこった(注4④)。記事内容の改革、印刷機の更新、用紙の改良や印刷技術の進歩による段数の増加、写真銅版の進歩などのほか、福引・懸賞・人気投票や勧誘チラシなどの隆盛にいたる。「中央新聞」は、政友会寄りの論調で声価を落とし、さらに《万朝報との間に深刻な販売競争》がおき、《大岡育造社長は葉書一本で社員の首を切ることを平気でやるといふ風に、振るわない理由が色々あった》とされる。その挽回をめざして、明治四二年春に小野瀬不二人が招聘され、早稲田閥の一人として永代静雄も入社したわけである。

明治四二年に新聞紙上をにぎわした出来事としては、四月に漱石の「それから」にも書かれた日糖事件、高商学生の運動、五月に二葉亭四迷の客死、七月の大阪大火、八月の朝鮮併合、一〇月に伊藤博文のハルビンでの狙撃死などであった。この年の「中央新聞」の紙面を通覧すると、刷新前は、文化的な記事として寄席や芝居の番組案内、美術界の紹介、イラスト入りの相撲の取り組みなどが目につき、文学関係の記事は極小であった。連載小説は、なにがし作の歴史小説「夕立雲」で、終了後の九月一六日から小山内薫「第二の恋」に変わった。四月下旬から記者募集の広告が載り、五月二二日には、同月二七日から社員を一七人増員する旨の社告がなされた。当日の二七日には、短歌・新体詩・小品文の《読者文芸募集》の社告があり、これ以降、文

芸関係記事が目立って多くなる。以前は書名などの書誌事項のみだった新刊紹介も、文芸誌や児童書の内容紹介記事に変わり、静雄や牧水らが署名入やイニシャルで書く文芸時評も散見される。文芸兼家庭部長は恵美孝三（光山）で、恵美は、年末の『中央新聞』一斉辞職のあと、『富山日報』や『帝国新聞』（大阪）にも静雄を誘って紙面改革にあたる人物である。

さらに、最終面に『家庭』頁も新設された。『家庭』新設の趣旨（明治四二年五月二七日）には、『新時代の要求に応せん為め本日より新設せる此一頁は、総ての家庭及び婦人問題を中心として我婦人社会に智識と趣味とを供給せんことを目的とし』、『故に本紙の家庭頁は一面に於て婦人の位置を高むべき指導の任を有すると同時に更に他の一面に於ては我国現代の婦人社会を透写する淨玻璃たらんことを期す』と述べる。家庭頁には女性向け論説や料理、流行紹介、著名婦人の消息、女学校便り、読者投書、長短の小説や児童向け読物などが掲載される。『婦人消息』欄には、華族夫人の外出入院とともに、『森林太郎夫人』（作家・森しげい鷗外の妻）の出産が紹介され（五月三〇日）、連載『吾家の銷夏法』では、衆議院議員夫人や法学博士夫人と並んで、『花袋氏夫人 田山りさ子』のインタビューが掲載されるなど（六月一三日）、文学上のネットワークを生かした記事が見られるようになる。

本稿で紹介する美知代だと推定される作品「老嬢の告白」も、この『家庭』頁に掲載された。

### (c) 『中央新聞』と永代美知代

無署名の二作品「老嬢の告白」「新夫人の打明話」以外にも、美知代が『中央新聞』に執筆した痕跡はある。九月一二日には、家庭頁に掌編「少女写生 休暇後」を「みちよ」の署名入で掲載している。夏季休暇が明けた女学校で、互いの日焼けをからかう二少女の前に、友達『山口さん』が別れを告げに現れる。脚気の母につきそって軽井

沢に転地している間に、父が脳溢血で急死して山口さんは運命が一転してしまったのだ。今後を尋ねられた山口さんは、『仕方がないから私交換局へでも勤めやうと思つてますの。』と言ひ、『……お可哀想だわねえ。本当に山口さんお察し申してよ。』／三人は互に手をとつて泣き入るのであつた。（『元』）と閉じられる。

恵まれた境遇の少女が肉親の死によつて転落する悲運のストーリーは、古典にも、「小公女」など明治期の翻訳文学にも珍しくはない。プロットのみ、埋め草的な掌編ではあるが、女学生同士の会話には面白みがある。美知代は数年後の「少女小説 郷里」（『少女画報』大正二年六月）でも、肉親の危篤の報によつて同級生に別れをつけて帰郷する少女をモチーフにしており、神戸女学院時代にこれに類する体験があつたのかもしれない。

いま確認できる限りで、美知代が初めて少女小説を書いたのは、明治四二年七月に『少女世界』に掲載した「まあちゃんの御看病」であつた。『中央新聞』に掲載した「少女写生 休暇後」は二作目に当たる。夫の勤務する新聞が読者獲得のために内容の刷新を試みた際に、美知代は子ども向け読物を提供した。翌年の『富山日報』でも少女小説を掲載しており、明治末から大正期を通じて、美知代が少女小説や児童向け読物を量産する一つの契機として、新聞の存在があつたのだろう。

このように美知代が、単に新聞記者の妻であつただけではなく、書き手として『中央新聞』に関わつていたのは確実なのだが、少女小説以外にも執筆していた可能性が大きい。

例えば、五月二七日に開設された家庭頁には『婦人倶楽部』と称する読者投稿欄が設けられ、『読者諸姉の投書を歓迎す』と添えられるが、少なくとも当初の一定期間は読者に扮して美知代が書いたのではないかと思われる節がある。例えば、五月三〇日の同欄には、『私は「その前夜」の女主人公エレナが好き』だという（原の女）、六月四日にも『ツルゲー子フなどの小説を読むと其女主人公の境遇が羨まし

く思はれて私共日本の女は何うして斯様に腑甲斐ないのだろうと悲しさが増すばかり」という(本郷、ちよ子)が投書している。短時日にツルゲーネフの愛読表明がつづくが、これは単なる偶然ではあるまい。美知代一家は、当時、牛込区原町に住んでいたし、『ちよ子』の名も美知代に近い。『蒲団』では、ツルゲーネフの「オン、ゼ、イブ」(その前夜)を時雄が芳子に教え、芳子は『エレネの恋物語を自分に引くらべて、其身を小説の中に置いた』(五)とされる。美知代自身も花袋に勧められてツルゲーネフ全集を愛読し、二葉亭四迷訳の「うき草」(ルーゼン)を筆写していたのである。

五月三〇日には、『此頃の新聞雑誌のお手料理』が『私共貧乏官吏』には合わないと嘆く(青山ひがみ女)、温泉に行きたいがお金がないので、東京近郊のよい温泉を教えてほしい、夫婦と赤ん坊と下女でいくらかかるかも教わりたいたい(本所病後の女)が投書している。実家の反対をおして結婚した美知代夫婦は経済的に苦しんだが、これらはそうした経済状態を反映しているように思える。後に「趣味の旅」(『家庭及学校』大正七年八月)で、美知代は自分たち夫婦を、『二人ながら揃って旅行好きの、温泉道楽』だと称している。また、『夫婦と赤ん坊と下女』という家族構成も、当時の美知代宅そのままなのだ。

六月四日には、『小説に出て来る人々は皆何して暮らしを立て、居るのでせう、若い男や女が屹度作者の筆に描かれて出るが生活の様子は少しも分らないではありませんか、幾ら空想でもお金なくて暮せる人間はありますまいと思ふが、如何でせう(大森、田鶴子)』という投書もある。家庭経済の苦境とともに、そうした形而下的な状況が小説に反映されていないという表明が、一〇月から連載されることとなる「新夫人の打明話」の発想の源だったのではないか。「新夫人の打明話」については別稿で紹介するが、月末の支払いの言い訳に苦労したり、質屋に通ったりする様など、経済的な困窮が、ユーモラスにもシリアスにも描かれる。

晩年の美知代から英語を習うなど親炙した原博巳によれば、美知代は、永代との結婚後の困窮の時期に、生活のためには何でも書いた、雑文も政治家の政談演説の原稿も書いたと話していたとのことである。一般記事にも美知代が書いたものがある可能性は大きいだろう。また、夏以降、家庭頁には、『日曜童話』が掲載され、『須磨子』(永代静雄のペンネーム)名の童話も掲載される。無署名の童話にも、美知代作の可能性のある作品もあるだろう。

このように夫が勤務する『中央新聞』に、小説、児童向け読物、一般記事と、意外に大きく美知代は関わっていたようなのである。明治四二年九月には、二名の『婦人記者募集』の社告が家庭部から出される。静雄も含めた早稲田派が大量退社した翌年の明治四三年に、美知代とも相識であった歌人の山田(今井)邦子が記者として『中央新聞』に入社する。憶測だが、女性関係記事を手広く書いていた美知代の穴を埋めるための採用だった可能性もあるのではないだろうか。

## 二 「老嬢の告白」

### (a) 書誌と梗概

「老嬢の告白」は、『中央新聞』の家庭頁に、明治四二(一九〇九)年六月一三日から八月一日まで連載された。全四三回。広島県出身の四二歳の『老嬢』の『私』が、自身の激しく転変する人生を回想して語る小説である。「老嬢の告白」には連載回数が明記されないが、以下、通し番号を付して( )で示すこととする。

——『私』が『老嬢』となる悲劇の発端は、周囲から『お前は不容姿だ』と言われてきたからであった(一・二)。『私』は懸命に勉強して、小学校を卒業すると、広島島の田舎から広島市に出て、宗教学校ミシオン・スクールの女学校に入学する。『一生を「聖き処女」』として過ごす決心をするものの、一方的にほのかに思うだけの初恋を経て自身が女であることを意識させられる(四・五)。二二歳で女学校を卒業するも、専修科に

入って学校にとどまった《私》は、舎監の甥で《神戸の某学院の出身者》の青年と相愛の仲になる(七)。寄宿舎が火事になり、下宿した家の未亡人が嫉妬深く、《私》と青年との交際を禁じる(九)。青年に西洋人の出資による洋行の話が急にもちあがり、二人は将来を誓って別れる。最初は文通していたが、三年目に突然、青年から婚約を破棄したいと手紙が届き、《私》の恋は終わる(一〇〜一二)。

失意のなか学校を卒業して帰郷した《私》は、父が死んで傾いた家や老母と弟妹を支えるために「私は最早女を廃める!」と心に叫ぶ(一四)。京都の女学校教師となった《私》は病をえて慢性ヒステリーになる(一五〜一六)。《私》は《同性の恋》に救いを求める。《私》の「デヤリスト」は女学校の同僚で、結婚間際に恋人の男が死んで、一生独身で過ごすことを覚悟していた(一八)。《私》に十年無音の恋人だった男性から手紙が届き、再会する。実は男性の洋行は田舎の許婚の女の実家の出資によるもので、既に結婚して子どももいるが、《私》が独身でいることに苦しんでいると言い、《私》に結婚を申し込む。《私》は男性の妻子を犠牲にするのをはばかって断り、男性を説得して帰郷させるが、別れたあとで自分の決断を嘲笑する(一九〜二四)。

《私》は久しぶりに帰郷するが、縁談が決まった妹の喜ぶ姿に暗い気持ちになり、急に一人で京都へ戻ってしまう(二六)。京都では、「デヤレスト」の同僚が急に結婚を決めて学校を辞め、《私》は孤立感から冷笑的な態度になる(二七)。新たな誘惑。三四歳の《私》は、同じ教会に通う年若い三高生の青年に母のように慕われて可愛がるようになる。母と息子のような関係がつづく折、夏休みに西洋人から借りた須磨の別荘に青年を誘い、一カ月共に暮らしているうちに青年が《私》への欲望を見せ始め、《私》は勝利を喜んだ上で、青年との距離を保つ(二八〜三四)。二人の仲が学院長の耳に入って問題になると、《私》は告げ口をした教員を道連れに退職する(三五)。

三六歳になった《私》は、東京の寄宿舎の舎監となる。大学院を出

て出版社に就職した弟が一家をかまへ、国の母を呼び寄せ、《私》も同居する(三六)。弟と結婚した男爵家の令嬢と不仲になった《私》は家を出、さらに男爵家からの出資による弟の洋行に際しても弟との間に感情の行き違いが起きて、《私》は悲痛を味わう(三八・三九)。三九歳で更年期を迎えた《私》は、女としての最後を迎えたと煩悶し、言い寄ってくる若い男性たちを近づけるが、《凡てを投出してふ》ことはなかった(四〇・四一)。母が死に、真面目になった《私》は、《老嬢》としての自身の《四十年間の試練》を《世間の参考》にしたいと述べて語り終える(四二・四三)。

女性の容貌の美醜、女学校生活、学問、恋愛と別れ・再会、ヒステリー、嫉妬、同性愛、年下の男性を誘惑、妹や弟嫁との葛藤、更年期、母の死、……と、物語られる《老嬢》の人生は多彩で一回ごとに激しく動き、あたかもジェットコースター・ドラマのごとくである。

#### (b) 執筆者推定

論者が永代美知代作だと推定している「中央新聞」の無署名の二作品のうち、「女子大学英语科出身 新夫人の打明話」は、文体的にも内容的にも、また連載終了後のフオロ記事で静雄が署名入りで書いていることから、美知代作だとほぼ断定できる。一方、本稿で紹介する「老嬢の告白」の執筆者判定については別論もある。

大西小生は、「永代静雄略年譜 明治四十二年において、《六月一三日〈中央〉紙に無署名で「老嬢の告白」連載(八月一日)。西山庵がモデルか」と記しており、「老嬢の告白」を美知代の夫である永代静雄作だと見なしている(注2⑤)。大西によれば、美知代と永代が夏期学校で出会った明治三十八年に、《神戸女学院教師の西山庵と中山とが、当時は淡路にいた詩人一色醒川のもとを五月に訪ねたことが二人きりの旅行と蒸し返され、疑惑を持たれた》という。《中山》とは、永代の友人で、美知代が恋愛事件で帰郷した際に二人の手紙の取り次ぎをし、「蒲団」刊行直後には「新声」に静雄援護の評を發表し(明

治四〇年一〇月、「花袋氏の書いた『蒲団』に現はれたる事実」美知代の再上京後にも二人の新居に居候していた中山三郎（泰昌・露峰）のことである。

大西が「老嬢の告白」を静雄筆だと見なすのは、この中山三郎の証言に拠る。中山は、花袋の「縁」にも《山田》として登場するが、「縁」初版本の上部余白に細かいペン字で書き込む形で手記を残していた。中山の孫にあたる清田啓子が、「資料紹介 花袋「縁」中の一モデルの証言」において、その内容を翻刻・紹介している（注②）。また、静雄の故郷の吉川町の郷土史研究家の広岡卓三が、中山から資料提供と口頭での説明を受けて、まとめている（注①）。「老嬢の告白」に関する箇所は、二文献でほとんど変わらないが、ここでは「花袋「縁」中の一モデルの証言」（注②）から引用する。静雄と喧嘩別れして、三人で住んでいた原町の家を出た中山が、七八カ月ぶりに永代の消息をきく場面である。

《そればかりではない、或日安成二郎君から聞くと、永代は最近、毎夕新聞社をよして、『中央新聞』に転じ、第一面に「老嬢の告白」といふ続き物を数十回に渡つて書いてゐるとの事である。ナニ、「老嬢の告白」！之は一大事だ、と私は驚愕した、此の題目だけでハッキリ想像される事は、私の大事な「おつかさん」を材料に使つてゐる事である。とすると、私だけしか知らない色々の事を永代に話した事がある。

「は、あ、それを書いてゐるナ」と直覚したので、私の亢奮は絶頂に達した。その事が「おつかさん」に知れたら、お前何をしゃべつたのだと叱られるのは分り切つてゐる。その責任上からも、矢も楯もたまらず、私は自動電話にかけつけて、永代を呼び出し、一別以来の挨拶も何もあつたものでなく、その「老嬢の告白」について詰問的に迫つて行つたところ、永代は平然として

「僕は之を社会的教育の見地から書いてゐるのだ、君から干渉を

うける理由はない。」とつっぱねて来た。私はやたらに亢奮してゐるだけに返す言葉がなく、ウヤムヤで電話口を離れたが、サア私の感情は愈以ておさまらない、（後略）

筆者注——「おつかさん」とは、前に省略した筆者の神戸時代の記述に詳しい、神戸女学院の教師西山いほり先生である。教会の青年達が「マザー」と呼んでいた人で、筆者より十五六歳年長、筆者は特に愛せられていた。「香道では恐らく日本一、茶道にかけても男子の大家も及ばぬ識見を有し、伎倆を有してゐる人」と説明されている。

中山に取材した広岡著（注①）でも、西山いほりについて《生涯をオールドミスで通した女性》だと説明している。たしかに「老嬢の告白」には、《老嬢》だと自認する《私》が教会で知り合った若い学生に母のように慕われ、共に須磨の別荘に行く回もあり（二八、三四）、中山三郎と西山庵の交友関係が素材の一つになっているのは確かだろう。ただ、中山が安成二郎から聞き知った内容には細かい錯誤が多い。永代静雄が「中央新聞」の前に勤務していたのは、《毎夕新聞社》ではなく、大西小生によれば「東京毎日新聞」であるし（注②）、「老嬢の告白」が掲載された家庭頁は、「中央新聞」の第一面ではなく最終面である。《驚愕》し《亢奮が絶頂に達した》中山が、永代静雄が「老嬢の告白」に関わっていることを、《書いてゐる》と盲信してしまつたのではないか。

また、中山の回想によると、中山は「中央新聞」に掲載された「老嬢の告白」を読んではいない。《此の題目だけでハッキリ想像される事は、私の大事な「おつかさん」を材料に使つてゐる事である》と、実際には作品を読むことなく、ただ「老嬢の告白」というタイトルのみで、「おつかさん」こと西山庵の物語だと《直覚》して激昂している。しかしながら、美知代の他作品にも書かれてるように、神戸女学院時代に美知代の周辺にいた《老嬢》の女性教師は西山庵一人ではない。「老嬢の告白」のなかで西山庵の挿話はあくまでモチーフの一

つに過ぎず、後述するように、全体としては同時代の《老嬢》をめぐる言説への変奏として構想されており、帰郷中や永代との結婚後の現在の美知代自身の心理や読書体験が色濃く反映されている。

もちろん、「老嬢の告白」は、美知代の夫の静雄が勤務している「中央新聞」に掲載されており、静雄が作品成立に関与しているのは確実である。「老嬢の告白」は、枠物語の形式をとっており、冒頭で《「記者」》が作品の紹介をし、連載が終わったあと、やはり《「記者」》によって作品の意義が三回にわたって語られる。このあたりの記述は静雄筆によるようにも思われ、少なくとも美知代と静雄の二人で作品の構想を練ったことは確実であろう。あるいは作品全体が夫婦合作の可能性もあるが、その場合にも、《「ですすれ共」》《「ですすもの」》といった美知代作品に特徴的な文章スタイルや、後述するような作品のモチーフによって、美知代の方が主体であり、最終執筆者は美知代だと本稿では判断している。マンガ家と編集者が相談をしながら二人三脚で作品を作り上げるように、静雄が恵美光山から連載小説の企画を取り付けてきて、美知代・静雄の二人で構想を練り、小説冒頭の《「記者」》などの箇所を除く全体の執筆は美知代が担当した、といったところではないだろうか。

以下、美知代作と推定できる特質を、簡単に検討したい。

### (c) 《老嬢》

《私》による物語が始まる前の口上で、《「記者」》は、世間から《悲痛の意味》を含まれる「老嬢」にも、それぞれ《血湧き涙流るゝ数奇を極むる運命》があると述べ、老嬢の物語を発表するのは、興味本位からではなく、女性の嘆きを嘲る《世の軽薄児を戒め》、また老嬢に同情の念を抱いてもらうためであるという。それを受けて、語り手の《私》は、《世に「老嬢」とか銘打つて書かれた小説も沢山御在ますが、老嬢の生涯は決してあんな浅薄な単純なものではありません、これを理解するのは私共のやうな、自分自身が老嬢の経験の味はつた者

でなくては解りませぬまい》(一)と言う。自身を《侘しい生活》をおくる《老嬢》だと認め、だが、《同じ血と同じ情とを持つた人間であるもの、時には血を湧き立たすやうな刺激》や泣くこともあった。かつては《独身者の片意地》で話せなかったそれらの思いを、平穩な境地に達したいま、《昔の懺悔》をお話したいと、語りの意図を説明する。世間の小説では《老嬢》を正しく伝えていないから、自身の過去を語るのだというのである。

「老嬢の告白」以前に発表された「老嬢」のタイトルをもつ作品として即座に想起されるのは、島崎藤村の「老嬢」(『太陽』明治三六年六月)「緑葉集」春陽堂、明治四〇年)であろう。

藤村の「老嬢」の女主人公・瓜生夏子は、独身女性が疎まれる世間に対して、学問さえ受けていなければどんな男とでも結婚して満足していられたのにと心中で嘆きつつも、偶然再会した女学校時代の同級生に、《結婚した貴方の方が幸福か、独身で居る私の方が幸福か》試してみようと語って別れる。夏子は、自分に憧れる年下の画家を、自分も好感をもちながら捨てる。独身のまま多くの《情人》を持ち、故郷に戻って私生児を出産するが、赤ん坊は死ぬ。狂気におちいった夏子は、《老嬢のなれの果と唄はれて》、《女房にする気はないか》と道行く男たちに声をかけるようになる。

「老嬢の告白」は、自分に憧憬する年下の男性を袖にするところなど、藤村の「老嬢」から素材を摂取しつつ、解釈を変えていく。夏子は、男性との安定した関係が信じられず、精神の自由のために画家の求愛を退ける。これに対して、「老嬢の告白」では、年下の青年との関係は、孤立し世捨て人のようになった《私》に再度華やかな人生に憧れようとさせた《誘惑》だどとらえられ、《私》は自分の女としての力を試すかのように青年を誘惑するが、それが成功しかかると《良心》が呼び覚まされて、肉体関係にはいたらない。総じて、美知代作品では、《老嬢》が男性との肉体関係を持つことは止められている。藤村の「老嬢」の女主人公は作者自身の分身だと見なされているもの

の、《老嬢》のおちいる行く末はあまりに悲惨である。それに対して「老嬢の告白」では、性的な誘惑は受けながらも、放縦することはなく、最終的には女主人公をまがりなりにも安定した境地に到達させている。

実は、美知代は、一年前にも「老嬢」のタイトルの作品を書いている（岡田美知代「老嬢」『文章世界』明治四一年四月）。恋愛事件による帰郷のあと、明治四一年四月に美知代は再上京するが、『文章世界』の投稿<sup>9</sup>切は前月一五日なので、「老嬢」は、まだ美知代が郷里の上下町にいる三月一五日以前に執筆・投稿されている。田舎に住む《私》は、近所に住む《其枝さん》が結婚が決まって有頂天な様子に反感を持つ。だが、彼女の結婚にいたる心理を想像し、『其枝さん』ももう《老嬢》なのだから無理もないと納得し、さらに女学院の三〇歳過ぎた洋行帰りの女性教員たちが結婚に焦って《安っぽい御亭主》に甘んじていることを想起する。そして、自身ももう《老嬢》ではないかと、有力な新進作家たちの出現に焦りを抱き、二十四五歳で優れた作品を残した《一葉女史》のことを思う。《私だつて今死んでも好い、何か一つすばらしいものが書き度いけれど、年中青い顔して、葉ばかり服んで居て何が出来る。／＼「死ね、死ね！」と口に出して自らを罵り、《狂人のやうに泣き叫んでも見度くなる》のである。女学院の女性教員については、「老嬢の告白」の《私》の「デヤリスト」の同僚教員の結婚の挿話（二七）に生かされているようである。

「文章世界」の同号には、佳作入選した岡田美知代の別の小品「日記の内」も掲載されている。《私》は不如意のうちに暮らし、頭痛に苦しむ。田舎の旧正月の風俗を見て、『藤村氏緑葉集の自序』の写生についての文章を想起し、田舎の光景を文章でスケッチする。そこへ近所の《其枝さん》が結婚の日取りが早くなつたことを告げに来て、『私』は皮肉を忘れて彼女が羨ましくなる。自分の煩悶に、『只の一日で可い、世間の女と同じに』飲食を快樂とおもうような生活をしたいと願う。ところへ都の先生から葉書が届き、先生の情愛に悲しみを

覚える。

「日記の内」と「老嬢」はセットになっており、いずれも結婚の喜びのなかにある年長の《其枝さん》と比して、田舎で煩悶して文学に何とか救いを求めようとする我が身を対照させている。何事か仕事をなさうとしながら焦って結婚する《老嬢》の姿に、『私』は自分の姿を重ねていくのである。

藤村の「老嬢」は、「日記の内」で引用された「緑葉集」に収録されており、美知代の「老嬢」は、藤村作に触発されているだろう。また、美知代の「老嬢」が掲載された前月の『女子文壇』（明治四一年三月一日）には、美知代と同じ備後在住の《中山八千代》の小説「老嬢」が《秀逸》として掲載されている<sup>10</sup>。高等師範出の教員の《自分》は、年末に七年ぶりに帰省したが、妹の結婚に浮かれる母や妹に孤独感を抱き、家を飛び出して正月を過ごすことなく戻っていく内容である。姉は三二で、妹は一九。妹の縁談に疎外された姉が実家を後にするというモチーフは、「老嬢の告白」（二六）にそのまま借用されている。中山八千代「老嬢」には、帰省した姉に向かって、妹が自分の結婚準備で退屈だろうからと雑誌を渡すが、『其雑誌の小説欄にあつたオールドミスには、胸がわく／＼した妹はわざ／＼オールドミスが見せたさを持つて来たのであつたらう』と姉は邪推する。《オールドミス》の小説とは、あるいは藤村の「老嬢」であろうか。「老嬢」のタイトルの小説が目につくことにより、次の「老嬢」の小説が作られ、連鎖していく。

いずれにせよ、『老嬢』の素材は、美知代にとつて、師の花袋の友人で、自らも会つたことのある藤村と、自分と同年代で同郷の中山八千代と、自身に近い二人によつてもたらされたモチーフであった。また、『老嬢』という素材そのものが、人ごとではなく、恋人から遮断されて都落ちし、煩悶しながらも懸命に習作を書く彼女自身にとつても、決して無縁の存在ではなかつた。

さらに、『老嬢』とは、帰郷中の過去だけのモチーフではなく「老

嬢の告白」執筆時現在の美知代にとっても切実なテーマであった。美知代と静雄とは、結婚当初から衝突を繰り返した。二人の新婚生活を間近で見ている中山三郎は、『永代と美知代との生活は、殆ど夫婦喧嘩の連続とも云つてよい、これは二人の愛が熱烈でありすぎたのとお互が我儘であり、そこへ女の方がいつも気位が高すぎたからであらう』と言ひ、一例として新婚早々の二人の激しい喧嘩と和解の挿話を記している(注②)。「牛込原町に於ける最初の新世帯当時——といつても赤ん坊が已に誕生すぎになつた頃の事」というから、千鶴子の誕生が三月二〇日、ちょうど「老嬢の告白」の発表に近い時期のことである。

この新婚夫婦の行き違いをテーマにして書かれたのが、『中央新聞』に連載されたもう一つの推定・永代美知代作品「新夫人の打明話」であった。以下、「新夫人の打明話」から引用する。

・「何故結婚したらう、一生恋で居た方がどんなに愉快で、そして美しかつたかと残念でくでたまりません。」(七)

・「全く、そんなに迄家庭のために働くのが嫌なら何故家を持つたのか、結婚したのか、私腹が立つてく堪りませんの。」(一五)

・「何だつて結婚なんぞしたんだらう、一生結婚なんかしなかつたら……独立して行けない事もなかつたに、あゝ何故何故……」かきむしるやうな気持ちに、それからそれへと考へると嫌で嫌で、終には何故八島と恋したか、八島をさへ呪はしく感じるのでした。」(一六)

新婚早々に夫や結婚に幻滅した妻の『私』は、繰り返しなげ結婚したのかと自問する。「何だつて結婚なんぞしたんだらう、一生結婚なんかしなかつたら……」という思いは、たやすく、結婚しなかつたときの自分、一生独身でいた場合の自分への想像に転じる。「老嬢」とは、美知代にとって、あり得たかもしれないもう一人の自分そのものなのだ。「老嬢の告白」とは、人生の分岐点において、既婚者であ

る現在とは異なつた選択をした場合のシミュレーションでもあるだろう。

「中央新聞」に連載小説の企画が立ち上がったときに、世間の軽侮や先行作品を差異化しつつ、それらの先入観を利用してエンタテイメントとしても仕立て、かつ自身と決して無縁ではない女性の心理を描きうる存在として、『老嬢』のモチーフが浮上してきたのではなかつたか。自身の分身であるからこそ、「老嬢の告白」では、結婚せず『老嬢』であることを『懺悔』しつつも、藤村や中山八千代の「老嬢」とは異なつた、平安な境地で作品が閉じられたように思える。

#### (d) 性と風刺

柄谷行人は、『隠すこととべきことがあつて告白するのではない。告白するといふ義務が、隠すことを、あるいは「内面」を作り出すのである』と言ひ、それにより『肉体』が、あるいは「性」が見出された』と述べる<sup>1)</sup>。また、花袋の「蒲団」を例にとつて、『告白・真理・性の三つが結合されてあらわれた』と言う。岡田美知代は、その花袋の「蒲団」成立に大きく寄与した。単に彼女の存在が「蒲団」の素材となつたというばかりではなく、美知代の書いた小説そのものを纂奪する形で「蒲団」は作られているのである(注1⑤)。

そして今度は美知代(と静雄)が、花袋の「蒲団」の成功の秘密——柄谷の言葉を借りれば『告白・真理・性』の三つ——を撰取して「老嬢の告白」を作っている。『告白』の語はタイトルにそのまま入り、作品冒頭の(一記者)は、この物語は『空想』ではなく、『事実有の儘の話』だと強調する。そして、『老嬢』が露骨に物語るのは、顔の美醜による結婚との距離、不実な男との関係、同性の恋、年下の男との恋、妹への嫉妬、更年期といった、精神的・肉体的な『性』の主題であつた。

ここでは、『同性の恋』を例にとる。「老嬢の告白」で、『私』は洋行した恋人から婚約破棄の手紙が届いたあと、女学校の同僚女性と

《同性の恋、女と女との恋》に進む(一六)。《私》は、《デヤレスト》の同僚女性が、《まるで姉妹のやうな関係で、私の肌着の洗濯なども、勝手に渡さず、悉な自分で為て呉れるのです》と語る(一八)。

こうした《同性の恋》についても、前年に岡田美知代名で発表した小説「侮辱」(『女子文壇』明治四一年四月臨時増刊、「文壇の花」特集号で天賞受賞)に既に描かれている。「侮辱」は、神戸女学院で親密な同性愛的な関係を結んでいた二人の女性が、東京に移って、男性が加わる三角関係に陥った顛末を、関西方言を交えながら闊達に描いた佳作である。「侮辱」でも、清水千香子と山家悦子との仲は親密で、《其頃学校では誰云ふと無く、二人の事をチャレストと呼びまして、果ては何か忌はしい、怪しい関係であるかのやうに云ふらす者さへありました。實際血を分けた姉妹でもよもや斯うまでとは思はれる位の親密さ、足袋から襦袢から、洗濯物は皆なお千香さんが一人で引受けて、虚言か本当か、肌を巻くものさへ二人は一所だと聞きました》と説明される<sup>12</sup>。「侮辱」も、美知代自身が神戸女学院での寄宿舎生活のなかで見聞した出来事を利用しながら構成しているが、「老嬢の告白」は、この自作を取り込みつつ創作されている。

なお、《同性愛》が大きく取り上げられるようになったターニングポイントは、明治四四年七月に新潟県で起きた東京の女学生同士の入水心中事件からだとされるが、それ以前にも、《同性の恋》は新聞にも頻繁に取り上げられている。「中央新聞」でも、「老嬢の告白」よりやや後ではあるが、明治四二年八月三二日に、《女同士の心中》の見出しで千葉の事件が掲載されている。赤枝香奈子は、一九一〇年代の女性作家の描いた女同士の親密な関係を探り、当時、女学校の寄宿舎が《同性愛》の《温床》と見なされており、女同士の親密な関係のうち、《病的友愛》はもっぱら女学生同士の「仮の同性愛」として、「病的肉欲」は男性化した女性による「真の同性愛」として認識されるようになり、もっぱら前者が問題にされ、後者は矯正不可能として不可視化されたと述べる<sup>13</sup>。

「老嬢の告白」で、《同性の恋》は、女学校の寄宿舎にいる《西洋婦人》から広まったとされ、なかには結婚して夫を持って《婦人宣教師》との肉肉関係を続ける女性もいるといった挿話が紹介される。

《私》は、《同性の恋》は、女学校の寄宿舎には必ず行なわれる《悪風》だと評価し、学校によって「イーチ、ラヴ」「デヤレスト」「ベツト」などと呼ばれるとも紹介する。そして、(一六)の末尾で自身が《同性の恋》であることを明かしたあと、(一七)で、《私》は、《同性の恋》を、女が長い独身生活で《不自然な節制》をしたことにより、《変成男子的の女》になるからだと理由づける。赤枝のいう「病的肉欲」に相当しよう。つづく(一七)は組版に不自然な空白箇所が多い。「情の満足」のタイトルがつけられ、空白部分の直後には《情の欠陥も補はれる》とあり、新聞社の自主規制によって、何らかの具体的な性愛行為が描かれた箇所活字が、印刷直前に抜かれたのかもしれない。

ただ、「青鞥」以前に同性愛を表象した「老嬢の告白」の先駆性は評価されるべきだが、同世代の田村俊子が、少し後に「あきらめ」(『大阪朝日新聞』明治四四年一月く三月)や「悪寒」(『文章世界』大正元年一〇月)などで女性同士の関係を積極的に描いたような姿勢は、美知代にはない。作品大尾で、《私》は、《幸に之れまで、色々の誘惑に会ひましたけれ共、女としての貞操を、肉体の上だけでは取り止めて来た事を、せめてもの満足とも思つて居ります》(四三)と、女性同性愛は性愛だとは認めておらず、「老嬢の告白」の語り手はあくまでも異性愛を正常とする立場に立っていることは明らかである。しかしながら、女性同士のシスターフッドな関係による救済の可能性も示された上で、一種の女学生文化としての《同性の恋》が早い時期に紹介されており、読者の興味関心も引いたことと想像される。

(e) 美知代のモチーフと風刺、新聞小説

「老嬢の告白」には、ほかに美知代作としての刻印を見いだすことが容易である。

まず出身地が広島県の田舎の豪家の生れで、宗教学校カトリック学校の女学校で教育を受け、寄宿舎生活を送ること。洋行する恋人は、神戸の学院の出身で、その郷里は広島県の《備後の山奥》である。広島、神戸、京都、東京のキリスト教社会であり、いずれも美知代（や静雄）の生活圏を利用しながら小説空間を形成している。

洋行する前に実家に暇乞いにくくと話していた恋人が、実は故郷に許婚がいたという設定などは、美知代が強く影響を受けていた小栗風葉「青春」を想起させよう（注1⑤）。

また、《老嬢》のモチーフに、恋愛事件で帰郷させられた時期の美知代の疎外された感覚が投影されていることは既に述べたが、ほかに美知代と静雄の恋愛事件が反映している。女学校の寄宿舎が火事にあい、《私》は知人の未亡人宅の二階に寄宿することになる（八）。ところがこの未亡人が嫉妬深く、《私》と恋人との仲を邪魔だてする。《私》は《堅固な籠に入れられたやう》で、外出の際にも下女がつけられ、手紙の送り先や内容も詮索される。未亡人は《私》の恋を勘づき、《若い男女の交際は危険》だからと名指しで忠告する。

《最後には疝癩を生しまして、私の忠告が聞けなければお気の毒だがお世話はできません、それ許りでない私は公然貴女の行為を発表する」と侮辱にも程のある人困らせを初めたのです、今の私ならば、「あら然うですか」位でずん／＼そんな家を出て了つたのでせうが其の頃は始終胸の痛さに悩む処女気でした。口惜しいとは思ふのですが、弁解も出来ず反抗も出来ず泣いて黙つて、謹慎を誓はせられました（九）

この、自分の忠告を聞かなければ公表するという未亡人の発言は、明らかに、美知代の恋愛事件に際して花袋がとつた監督者としての抑圧的な態度や「蒲田」に公表した作家姿勢への風刺であろう。前項で

も触れた小説「侮辱」でも、女性二人、男性一人の三角関係において、年長女性の年下女性への抑圧的な態度には明らかに花袋が諷刺されていた。監督者であることをたてにとつた師の態度を、《侮辱》としてとらえ、年長の女性に投影して風刺するといった手法を、「老嬢の告白」でも継承している。

関礼子は、《連載形式に求められるのは、一回ごとの山場の設定と次回への興味の接続》だと指摘する<sup>14</sup>。「老嬢の告白」は、《告白・真理・性》によって組み立てるとともに、新聞小説のセオリーにのっとって、各回の末尾を次回につなげるように工夫して、大衆の興味を引きつけようとしている。小栗風葉「青春」や小杉天外「魔風恋風」といった新聞小説を読んでいた美知代にとって、無署名とはいえ新聞連載を書くことは魅力的だったと想像される。恋愛事件によって帰郷させられていた時期の無為の思い、仕事・文学に生きるのだと思いつつも、煩悶していた時期の自身を《老嬢》のなかに投影しつつ、エンタテイメントとして組み立てていったのである。

(f) 読者の反応

最後に、参考として、紙面に掲載された「老嬢の告白」に関する反応を記しておく。

連載中に「某博士談」の記事が掲載されるほか（七月七日）、連載終了後に（一記者）によるフォロワー記事が三回にわたって掲載される。

この他、読者投稿の《婦人倶楽部》に、何度か「老嬢の告白」や《老嬢》に関する短い感想が掲載される。

・《小説家のお書きになる女は何故皆お若い方に限られてゐるんでせう、年齒のゆかぬ女学生や令嬢よりも更に幾倍も幾十倍も辛き経験を嘗めて浮世の波風に揉まれて来た女の方が余程複雑で趣味も多からうと思ひます（京都、円山糸子）（六月二〇日）

・《老嬢の告白の主人公は何んな御方でせう、皆さん、当てる見やうではありませんか、自身には頻りに不器量のやうに嘆いて

被居しやるが細面の目鼻立の劃然したそして難をいへば生際の綺麗でない稍渋味が、つた色の方と思ひます（麻布小林米子）

（六月二五日）

・《老嬢の告白》を読んで昔の恋と今の恋との相違がわかりました。

老嬢の主人公はいつも周囲から動いてますのね。だがお気の毒だわ（京橋もゝ代）（六月二六日）

・《私は老嬢の告白の女主人公ではありませんが、お恥しながら大の醜婦なんです。どうかして美人になり度いと思ひますが、美顔術は多少の効能が御座いませうか（深川醜女）（六月二七日）

・《老嬢の告白》婦人は如何なる御性質の御方なるや其恋人は実に無情の御方と御推察申升私も我身につまされ日々読みながら涙が出升出来ずならば一度御面会致し度存じ升（愛情女の一人）（七月三日）

・《老嬢の告白》を読みますと、頻りに独身嘆が聞えますが、私は男でも女でも独身に限ると思ひます、独身の幸福と自由とは決して家庭に束縛された人の知らぬ処です（千駄ヶ谷ますみ）

（七月四日）

・《確かとした信念から絶対的に一生を老嬢で押し通せたならば或は結構かも知れませんが世間には家庭の人となりて究屈なる束縛を受くるが嫌やさに寧ろ浮た生活をして面白可笑しく暮らして見たいなぞとんでもない独身主義を振りまはすお方があるから随分滑稽ではありませんか千駄ヶ谷のますみさんとやらお耳が痛くはなくつて（京橋はる子）（七月一〇日）

・《記者様、愈々「老嬢の告白」も終りましたね。私は毎日日々あれ丈けを切り抜いてスクラップ、ブックに張り付けましたが最後の日の分を張つた夜、又々初めから繰回して拝読致しました。すると女主人公四十何年間の佛が明瞭と眼の前に浮んで、其夜一夜は怎うしても睜れませんでした（麻布の少女）（八月

一四日）

・《老嬢の告白》色々と身につまされることにははし必々と拝見仕候。「家庭教師日記」の現はるゝ日を相待ち居り候（信州軽井

沢の客）（同）

編集サイドによる創作の可能性もあるが、おおむね読者はこの「老嬢の告白」に人生の諸相を見ていたのではないだろうか。

### 三 岡田（永代）美知代 著作リスト

本稿末尾に岡田（永代）美知代の著作リストを掲げている。これは、「広島の女性作家 岡田（永代）美知代研究（2）」——著作の概要（注1②）に掲載した著作リストを補訂したものである。本稿で紹介した「中央新聞」掲載の作品など、前稿発表以後の調査やご指示によって新たに判明した作品を加えた。「中央新聞」や「富山日報」には、ほかに無署名ながら美知代作ではないかと思われる記事や読物もあったが、確証がもてないものは本リストには掲載していない。さらに検討を続けたい。

作業の結果、判明した美知代の作品数は、以下の通りである（二〇一三年一月末日現在）。

I 著書……六冊

1 単著……五冊（うち、翻訳二冊）

2 共著……一冊

※ほかに、美知代による代作の可能性がある書籍一冊

II 新聞雑誌掲載作品……二〇九作品

（掲載誌・掲載時期未詳のもの、現物未見のものを含む。本文が掲載されず、講評により発表の事実のみが知られる作品は、リストには加えたが、カウントはしていない。）

III 生前未発表原稿……一二作品

本リストは最終版ではない。今後も調査を続け、新たに発見・確認した作品をリストに加えて更新する予定である。美知代に関する情報や資料をお寄せいただければ幸いである。

注

- 1 美知代に関する拙稿として、以下のものがある。
  - ① 「広島的女性作家・岡田（永代）美知代研究（1）―研究の現状と課題」〔内海文化研究紀要〕三九、二〇一二年三月
  - ② 「広島的女性作家・岡田（永代）美知代研究（2）―著作の概要」〔広島大学大学院文学研究科論集〕七一、二〇一二年二月
  - ③ 「資料翻刻」永代美知代「国木田独歩のおのぶさん」〔内海文化研究紀要〕四〇、二〇一二年三月
  - ④ 「地域性」をめぐる攻防―岡田（永代）美知代と田山花袋の描くローカリテイ」〔近代文学試論〕五〇、二〇一二年二月
  - ⑤ 「作者」をめぐる攻防―田山花袋「蒲団」と岡田美知代の小説」〔日本近代文学〕八八、二〇一三年五月
- 2 美知代と静雄の動向に関しては、主に次の文献を参照した。
  - ① 広岡卓三「永代静雄伝」〔さつき句会、一九五九年〕
  - ② 清田啓子「資料紹介 花袋「縁」中の一モデルの証言」〔駒沢短大国文〕一〇、一九八〇年三月
  - ③ 「永代静雄展―もう一人の「蒲団」のモデル」〔田山花袋記念館、一九九一年〕
  - ④ 「田山花袋記念館研究叢書第二巻『蒲団』をめぐる書簡集」〔館林市、一九九三年〕
  - ⑤ 大西小生「『アリス物語』『黒姫物語』とその周辺」〔ネガ！スタジオ、二〇〇七年〕
  - ⑥ 小谷野敦「岡田美知代と花袋「蒲団」について」〔日本研究〕三八、二〇〇八年一月

- ⑦ 吉川豊子「永代美知代・守本祐子「略年譜」」〔新編〕日本女性文学全集 第三巻「青柿堂、二〇一一年」
- 3 花袋の「蒲団」成立の過程と美知代の書き物との関係については、注1⑤の拙稿参照。
- 4 「中央新聞」は現存せず、社史も発行されていない。本稿では、次の文献を参照した。
  - ① 「新聞総覧」明治四三年版（日本電報通信社、一九一〇年二月）復刻版、大空社、一九九一年）
  - ② 西田長壽「東京都新聞史 その二 明治後期」〔地方別日本新聞史〕日本新聞協会、一九五六年）
  - ③ 山本武利「近代日本の新聞読者層」〔法政大学出版局、一九八一年）
  - ④ 大西林五郎、宍戸啓一「日本新聞発展史（明治・大正編）」〔樽書房、一九九五年）
  - ⑤ 春原昭彦「日本新聞通史 四訂版」〔新泉社、二〇〇三年）
- 5 明治四二年八月三日の《婦人倶楽部》には、《当欄の投書は日々ふへる一方で編輯に忙しい時など取捨に甚だ困ります、どうぞ皆さんは成る可く書くことを簡単にして要領を挙げそして他人の悪口などせぬやうに願ひます、そうでないと折角の御投書も没書にしますよ、（掛り）》という注意書きが載り、この時点では投書が増えていることがわかる。
- 6 作品完結後八月二―四日のフォロー記事「老嬢の告白」に現はれたる教訓（《一記者》とあるが、おそらく永代静雄の執筆による）では、《前後約六十日、五十回を超えるの大長篇となりまして》と書かれている。論者が閲覧した国会図書館のマイクロロールには欠頁もあつたので、あるいは今回の紹介が作品の総てではない可能性もあるものの、五〇回を超えることはないはずである。
- 7 中山三郎については、注2①②のほか、羽原清雅「続・ある編集者の軌跡―中山泰昌（三郎）」の豊かな苦闘」〔帝京社会学〕二

二、二〇〇九年三月）参照。

8 大西小生は、美知代と静雄それぞれの名義の作が相手の作である可能性や、合作の可能性について指摘している（注2⑤）。

9 金子明雄は、この小説が《欲望を精神と肉体に文節し、その両立不可能性に悲劇の根拠を見出す》と概括するとともに、結婚か独身かという二者選択しかできないこの時代の知識人女性のおかれた社会状況と、いずれを選んでも幸福になる可能性がない物語展開を指摘する（「老嬢」と明治三〇年代における性欲のモチーフ―島崎藤村の小説表現Ⅳ―『研究紀要』日本大学文理学部）六一、二〇〇一年一月）。

10 翌月の「女子文壇」明治四一年四月臨時増刊の「文壇の花」特集号には、美知代の「侮辱」が《天賞》として掲載された。中山八千代作の「老嬢」が掲載された三月号には、その「文壇の花」の募集要項もあり、美知代は確実に同号に目を通してはいるはずである。

11 「定本日本近代文学の起源」『告白という制度』（岩波現代文庫、二〇〇八年）

12 女学校における《デヤレスト》については、後年の「秋立つころ」【希望】大正四年十二月～五年一月）でも書かれている。《四十に近い鎌倉教頭はオールドミスに有り勝ちな、兎角美しい秀才の少女を好んで、従来寮生達から種々の噂を立てられた》人物であったが、主人公の少女を熱愛して《デヤレスト》と称されるのである。これも、女学校における女性教員を軸にした女性同士の関係を示した作の一つである。

13 赤枝香奈子「近代日本における女同士の親密な関係」（角川学芸出版、二〇一一年）

14 「一葉以後の女性表現―文体・メディア・ジェンダー―」『文体の端境期を生きる』（翰林書房、二〇〇三年）

#### 付記

本稿は、JSPS科研費(23520227)助成による成果の一部である。岡田(永代)美知代作だと推定される作品の公開を、著作権継承者にお許しいただいた。

本稿執筆と美知代の著作リスト作成にあたり、府中市上下歴史文化資料館(広島県)、田山花袋記念文学館(群馬県館林市)、守本祐子氏、原博巳氏、大西小生氏から、資料提供・閲覧・教示など多くの援助を賜った。共同研究者の遠藤伸治氏・瀬崎圭一氏からも助言をいただき、本学大学院生であった盧氷・井本まどか・板倉大貴の各氏には雑誌調査と複写資料整理の作業補助を担ってもらった。

また、本学図書館をはじめ、広島県立図書館、広島市立中央図書館、広島県府中市立図書館上下分室、神戸女学院大学図書館、同史料室、広島女学院大学図書館、国立国会図書館、日本近代文学館、大阪府立中央図書館国際児童文学館、お茶の水図書館、東京大学明治新聞雑誌文庫、日本新聞博物館新聞ライブラリー、三康図書館、東京都立図書館(多摩、日比谷)、神戸市立中央図書館において、資料閲覧やレファレンスの便宜をはかっていただいた。

各位に厚くお礼申し上げます。

表1 岡田(永代)美知代 著作リスト

	西暦	年月日	出版社名/ 発表雑誌	巻号	題名	発表名	上下町	備考
<b>I-1 著書(単著)</b>								
1	1917	大正6年11月28日	科外教育叢書刊行会		花ものがたり	永代美知代		短編集
2	1917	大正6年7月31日	科外教育叢書刊行会		ケーザル	永代美知代		
3	1918	大正7年2月25日	科外教育叢書刊行会		世界の三聖	永代美知代		
4	1923	大正12年12月8日	誠文堂		奴隷トム アンクルトムスケピン	永代美知代		翻訳・ストウ夫人原著
5	1924	大正13年5月21日	誠文堂		愛と真実 ジョン・ハリファックス	永代美知代		翻訳・ミュラック夫人原著
<b>I-2 著書(共著)</b>								
1	1924	大正13年5月8日	春洋社	文芸協会編	熱筆 名著選集	永代美知代		全5篇のうち、美知代執筆は「柳川春葉のなごみ仲」
<b>I-3 著書(代作?)</b>								
1	1915	大正4年7月12日	中山春秋社		ニコニコ式処世法	牧野元次郎		美知代による代作か? 中山三郎の証言(「花袋「縁」中の一モデルの証言」)
<b>II-1 新聞雑誌掲載作品</b>								
1	1902	明治35年5月10日	中学世界	5巻6号	梅	岡田三米		△和歌
2	1902	明治35年6月1日	中学世界	5巻7号	暮春	岡田道代		△和歌
3	1902	明治35年6月1日	中学世界	5巻7号	ほたる	岡田美那子		△和歌
4	1902	明治35年9月1日	中学世界	5巻11号	露	巖谷涙子		△和歌
5	1903	明治36年1月1日	中学世界	6巻1号	小使	岩谷敏雄		△抒情文
6	1906	明治36年1月1日	中学世界	6巻1号	月	岡田道代		△和歌
7	1903	明治36年2月10日	中学世界	6巻2号	梅	岡田紫葦		△和歌
8	1903	明治36年3月1日	中学世界	6巻3号	春の歌	岡田涙		△和歌
9	1903	明治36年3月10日	中学世界	6巻4号	暮春の歌	岡田眞鏡		△和歌
10	1903	明治36年4月10日	中学世界	6巻5号	戦死者の児を見て	岡田眞鏡		△和歌
11	1903	明治36年4月10日	中学世界	6巻5号	渡良瀬の辺りを思ひて	岡田美知代		△和歌
12	1903	明治36年6月20日	中学世界	6巻8号	五月雨	岡田紫野		△和歌
13	1903	明治36年4月10日	中学世界	6巻5号	霞	岡田眞鏡		△和歌
14	1904	明治37年7月10日	中学世界	7巻9号	(無題)いたで負ひし〜	岡田美知代		△和歌
15	1904	明治37年7月10日	中学世界	7巻9号	友達	岡田美知代		△叙事文 *
16	1904	明治37年8月10日	中学世界	7巻10号	(無題)何となくさびしき思ひ〜	岡田萬壽代		△和歌
17	1904	明治37年10月10日	中学世界	7巻13号	(無題)しめやかに平家を〜	岡田美知代		△和歌
18	1904	明治37年12月10日	中学世界	7巻16号	雑種子	岡田刈萱		△叙事文 *
19	1904	明治37年12月10日	中学世界	7巻16号	この死	岡田刈萱		△抒情文 *
20	1905	明治38年2月1日	女子文壇	1巻2号	溝萩	岡田刈萱		△
21	1905	明治38年2月1日	女子文壇	1巻2号	蝴蝶の賦	岡田刈萱		△新体詩
22	1905	明治38年3月10日	中学世界	8巻3号	白羽箭	岡田美千代		△叙事文 *
23	1905	明治38年5月10日	中学世界	8巻6号	わが運命	岡田美知代		△
24	1906	明治39年3月15日	文章世界	1巻1号	戦死長家	栗女史		△懸賞小説
25	1906	明治39年4月1日	新声	14編4号	雪	美知代		
26	1906	明治39年6月1日	新声	14編6号	長女	岡田美知代		
27	1906	明治39年7月15日	文庫	32巻1号	お須磨	美知代		
28	1906	明治39年8月25日	新潮	5巻2号	文から	美知代		

25	1906	明治39年9月1日	新声	15編3号	下賀茂の森	美知代	
26	1906	明治39年9月25日	実業之横浜	3巻2号	祝辞	美知代	△
27	1906	明治39年9月25日	実業之横浜	3巻2号	屁の色	美知代	△
28	1906	明治39年9月25日	実業之横浜	3巻2号	梅屋の二階	(無署名)	△
29	1906	明治39年10月1日	文藝倶楽部	12巻13号	森の黄昏	美知代	目次は「岡田美知代」。 内容は「下賀茂の森」 に同じ
30	1906	明治39年10月25日	実業之横浜	3巻3号	梅屋の二階	美知代	△
31	1906	明治39年11月25日	実業之横浜	3巻4号	梅屋の二階	美知代	△
32	1906	明治39年12月1日	文藝倶楽部	12巻16号	姑ごゝろ	岡田美知代	
33	1906	明治39年12月15日	新潮	5巻6号	里居	美知代	目次は「美千代」
34	1907	明治40年1月1日	新声	16編1号	家庭	美知代	
35	1907	明治40年1月10日	実業之横浜	3巻6号	不孝児	美知代	△
36	1907	明治40年2月10日	実業之横浜	3巻7号	不孝児	美知代	△
	1907	明治40年2月15日	文章世界	2巻2号	キーチャン	岡田美知代	△*
	1907	明治40年2月15日	文章世界	2巻2号	移転	岡田美知代	△*
37	1907	明治40年2月25日	実業之横浜	3巻8号	狼の権三	美知代	△
38	1907	明治40年3月1日	新声	16編3号	籠行燈	美知代	
39	1907	明治40年3月14日	群馬新聞		その日へ	刈萱	未確認
	1907	明治40年4月15日	文章世界	2巻5号	でこ市	岡田美知代	△*
40	1907	明治40年4月1日	新声	16編4号	わか草 処女の日記より	岡田美知代	目次は「わか草」
41	1907	明治40年4月13日	山鳩	39	蛇	美知代	目次は「岡田美知代」
42	1907	明治40年5月1日	新声	16編5号	御おとづれ	美知代	
43	1907	明治40年5月20日	新潮	6巻5号	《想苑》狼の権(翻訳 小説) ツルゲーネフ	岡田美知代	目次は「狼の権 岡田 美知代」
44	1907	明治40年5月25日	実業之横浜	3巻12号	閑窓漫筆	美知代	目次は「岡田美知代」
45	1907	明治40年5月30日	実業之横浜	4巻1号	耶蘇校長	岡田美知代	
46	1907	明治40年6月10日	山鳩	40	蛇	岡田美知代	
47	1907	明治40年6月15日	文庫	34巻4号	その月その日	岡田美知代	
48	1907	明治40年6月15日	文章世界	2巻7号	一本榎	岡田美知代	目次は「岡田美千代」
49	1907	明治40年7月1日	新声	17編1号	亀さ	岡田美知代	
50	1907	明治40年7月5日	女学世界	7巻10号	机上の花	刈萱女	
51	1907	明治40年7月15日	文章世界	2巻8号	いとこ	岡田美知代	目次は「岡田美千代」
52	1907	明治40年10月1日	新声	17編4号	土手三番町	岡田美知代子	
53	1907	明治40年10月15日	新潮	7巻4号	「蒲団」について	横山よし子	作者名の前に「蒲団の ヒロイン」と小書き。 目次は「蒲団について」
54	1907	明治40年10月15日	実業之横浜	4巻11号	夢現	岡田美知代	
55	1908	明治41年2月1日	文章世界	3巻2号	紋附	岡田美知代	田山花袋選「会話」地 賞
56	1908	明治41年4月15日	女子文壇	4年6号	侮辱	岡田美知代	天賞
57	1908	明治41年4月15日	文章世界	3巻5号	日記の内	岡田美知代	△文叢・佳作
58	1908	明治41年4月15日	文章世界	3巻5号	老嬢	岡田美知代	
59	1908	明治41年10月15日	女子文壇	4年15号	父子	岡田美知代	人賞
60	1909	明治42年1月1日	家庭雑誌	2巻1号	御殿堀	岡田美知代	目次は「小説 お殿堀」
61	1909	明治42年2月1日	家庭雑誌	2巻2号	ふたり	美知代	目次は「小説 ふたり」
62	1909	明治42年5月15日	女子文壇	5年7号	火事	永代美知代	
63	1909	明治42年6月13日 ～8月11日	中央新聞		老嬢の告白	(無署名)	推定・美知代作(また は、永代静雄との合作 か)、最初3回は「心を 傷ましむる」の角書あり
64	1909	明治42年7月1日	少女世界	4巻9号	まあちゃんの御看病	美知代	目次は「まあちゃん」
65	1909	明治42年9月12日	中央新聞		少女写生 休暇後	みちよ	
66	1909	明治42年10月6日 ～11月17日	中央新聞		女子大学英文科出身 新夫人の打明話	(無署名)	推定・美知代作
67	1910	明治43年8月12～ 14日	富山日報		少女ぶんがく 万壽子 のお祖母さん	まあちゃん 記	一(8/12)・二(8/13)・ 三(8/14)

68	1910	明治43年8月25~27日	富山日報		島崎藤村夫人を思ふ	ミセス、エヌ、エヌ		上(8/25)・中(8/26)・下(8/27)
69	1910	明治43年8月29日~9月1日	富山日報		少女ぶんがく 万壽子のお祖母さん	まあちゃん記		一(8/29)・二(8/31)・二(三の誤り・9/1)
70	1910	明治43年9月1日	スバル	2年9号	ある女の手紙	永代美知代	1	
71	1910	明治43年9月7~8日	富山日報		少女小説 薄志弱行	エヌ夫人		上(9/7)・下(9/8)
72	1910	明治43年10月1日	スバル	2年10号	里子	永代美知代	1	
73	1910	明治43年11月16日~17日	富山日報		楠緒子女史を追想す	永代美知代		上(11/16)・下(11/17)
74	1910	明治43年11月25日~28日	富山日報		蟹江博士未亡人	みちよ女		上(11/25)・中(11/27)・下(11/28)
75	1910	明治43年12月1日	中央公論	25年12号	一銭銅貨	永代美知代	1	「女流作家小説拾篇」の内
76	1910	明治43年12月1日	ホト、ギス	14巻4号	岡澤の家	永代美知代	1	
77	1911	明治44年2月1日	少女世界	6巻3号	貰った妹	美知代		
78	1911	明治44年2月1日	少女	3巻2号	少女小説 上京	永代美知代		
79	1911	明治44年3月5日	少女の友	4巻4号	苦の後	永代美知代		目次は「少女小説 苦の後」
80	1911	明治44年4月1日	ホト、ギス	14巻8号	清のぐるり	永代美知代		
81	1911	明治44年	少女界	10巻8号	かりうと	永代美知代		未確認
82	1912	明治45年1月1日	少女世界	7巻1号	お年玉	永代美知代	3	
83	1912	明治45年2月1日	少女世界	7巻3号	花枝さんの雪兎	美知代	3	目次は「永代美知代」
84	1912	明治45年4月1日	少女世界	7巻5号	姉様の指環	永代美知代		
85	1912	明治45年7月1日	少女世界	7巻9号	暗い叔母さん	永代美知代		目次は「暗いをばさん」
86	1912	大正元年9月1日	家庭バック	1巻5号	虫干	永代美知代		
87	1912	大正元年9月1日	少女世界	7巻12号	帰校前	永代美知代		
88	1912	大正元年11月1日	少女世界	7巻15号	赤い柿	永代美知代		目次は「少女小品 赤い柿」
89	1912	大正元年12月1日	少女世界	7巻16号	罰金ごっこ	永代美知代		
90	1912	大正元年12月1日	家庭バック	1巻11号	でべちゃんと赤ん坊	永代美知代		
91	1913	大正2年1月1日	少女世界	8巻1号	日本文学講義 落窪物語	永代美知代	2	目次は「おちくぼ物語」
92	1913	大正2年2月1日	少女世界	8巻3号	日本文学講義 落窪物語(下)	永代美知代	2	目次は「おちくぼ物語」
93	1913	大正2年3月1日	少女世界	8巻4号	英国の子供小説 オリヴァー・ツイスト 一	永代美知代		目次は「英国の子供小説」
94	1913	大正2年3月15日	婦人評論	2巻6号	小説 洪水の後	永代美知代	2	
95	1913	大正2年4月1日	少女画報	2年5号	英文のお手紙	永代美知代	3	目次は「少女小説 英文のお手紙」
96	1913	大正2年4月1日	少女世界	8巻5号	英国の子供小説 オリバー・ツイスト 二	永代美知代	2	目次は「オリバー・ツイスト」
97	1913	大正2年5月1日	少女世界	8巻6号	英国の子供小説 オリバー・ツイスト(第三)	永代美知代	2	目次は「オリバー・ツイスト」
98	1913	大正2年6月1日	少女世界	8巻7号	英国の子供小説 オリバー・ツイスト(第四)	永代美知代	2	目次は「オリバー・ツイスト」
99	1913	大正2年6月1日	少女画報	2年8号	少女小説 郷里	永代美知代	3	目次は、永代みちよ「少女小説 郷里へ」
100	1913	大正2年6月1日	婦人評論	2巻11号	小説 同窓の人々	永代美知代	3	目次は「永代美千代」
101	1913	大正2年7月1日	少女世界	8巻8号	英国の子供小説 オリバー・ツイスト(第四)	永代美知代	2	本来は「オリバー・ツイスト」(五)
102	1913	大正2年8月1日	少女画報	2年10号	少女小説 サマー、ハウス	永代美知代	3	
103	1913	大正2年8月1日	婦人評論	2巻15号	小説 縁談	永代美知代	1	大5『女子の友』に同一作品
104	1913	大正2年9月1日	淑女画報	2巻9号	花嫁の型	永代美知代		目次は「永代美知代」
105	1913	大正2年9月1日	少女世界	8巻10号	福富草子	永代美知代	2	目次は「福富草子の話」
106	1913	大正2年9月15日	婦人評論	2巻18号	小説 冷い顔	永代美知代	2	目次は「永代美千代」
107	1913	大正2年9月	現代	4巻9号	(不明)	永代美知代		未確認 中興館書店

108	1913	大正2年10月10日	少女世界	8巻12号	国なまり	永代美知代	1	目次は「お国なまり」
109	1913	大正2年10月10日	少女画報	2年13号	少女小説 窓の下	永代美知代	3	
110	1913	大正2年11月15日	婦人評論	2巻22号	小説 出戻りさん	永代美知代	2	
111	1913	大正2年12月1日	少女世界	8巻14号	その日その夜	永代美知代	3	
112	1914	大正3年1月1日	少女世界	9巻1号	この頃の少女の使ふ新しい言葉	永代美知代		目次は「少女の新用語」
113	1914	大正3年2月1日	少女世界	9巻2号	現代少女の新用語	(無署名)		目次は、永代美知代「少女の新用語」
114	1914	大正3年2月1日	婦人評論	3巻3号	小説 郷里のをんな	永代美知代	1	
115	1914	大正3年2月1日	ニコニコ	37	新カーテン、レクチュアー	永代美知代		
116	1914	大正3年3月1日	ニコニコ	38	英仏女優人気競べ	永代美知代		
117	1914	大正3年3月1日	淑女画報	3巻3号	女権史巻頭の二女性	永代美知代		
118	1914	大正3年3月1日	少女世界	9巻3号	現代少女の新用語	(無署名)		目次は「少女新用語」
119	1914	大正3年3月1日	少女世界	9巻3号	少女小説 生みの母	永代美知代	3	
120	1914	大正3年4月1日	少女世界	9巻4号	少女小説 生みの母(下)	永代美知代		目次は「少女小説 生みの母」
121	1914	大正3年5月1日	淑女画報	3巻5号	野菜ばかりの西洋惣菜料理十五種(手軽で、経済的で、美味で、誰にでも出来る)	永代美知代		目次は「野菜ばかりの西洋料理十五種」
122	1914	大正3年5月1日	少女世界	9巻5号	現代少女の新用語	永代美知代		目次は「少女の新用語」
123	1914	大正3年6月1日	少女世界	9巻6号	現代少女の新用語	永代美知代		目次は「少女の新用語」
124	1914	大正3年6月1日	淑女画報	3巻7号	短い恋と長い恋の新レコード	永代美知代		
125	1914	大正3年6月1日	新小説	19年6巻	蛙鳴く声	永代美知代	2	本人が「蛙鳴く頃」と修正書込
126	1914	大正3年6月1日	ニコニコ	41	七人目のが理想の夫 四人目の今の夫を離婚の訴訟中	永代美知代		目次は「四人目の今の夫を離婚の訴訟中」
127	1914	大正3年7月1日	ニコニコ	42	"富か芸術か \$35,000,000か画板か	永代美知代		目次は「富か芸術か \$35,000,000乎キャンパス乎」
128	1914	大正3年8月1日	少女世界	9巻8号	地獄の御飯のたべられる 湯の宿から	永代美知代		目次は「湯の宿より」
129	1914	大正3年9月1日	少女世界	9巻9号	泥棒に一冊の書物を与へた寄宿舎の少女	永代美知代		目次は「泥棒に書物を与へた寄宿生」
130	1914	大正3年9月1日	ニコニコ	44	魔王の恋の日記	永代美知代	2	
131	1914	大正3年9月or 10月	たかね		ドウデエ盲皇帝	(不明)		未確認、「早稲田文学」第二次、108号、大3.11. 1の彙報「新聞雑誌文学一覽」に記載
132	1914	大正3年10月1日	淑女画報	3巻11号	二、賑かなセルビアの結婚=何事も父母の意志次第で動く青年男女	永代美知代		目次は「セルビアの結婚」
133	1914	大正3年11月1日	少女世界	9巻11号	貧賤の身から発奮して女学校の教師に!	永代美知代		
134	1915	大正4年1月1日	少女世界	10巻1号	十六で表彰された親孝行な子守女	永代美知代		目次は「十六歳で表彰された子守女」
135	1915	大正4年2月1日	ニコニコ	49	莞爾々々的あの家此家	永代みち代	3	
136	1915	大正4年3月1日	少女世界	10巻3号	火炎に包まれゆく野呂さん	永代美知代	3	目次は「火炎に包まれ行く少女」
137	1915	大正4年3月1日	ニコニコ	50	おさつで買収した【女客】	永代美知代	2	
138	1915	大正4年4月1日	少女世界	10巻4号	少女小説 ゆく水	美知代		目次は「少女小説 ゆく水」美知代
139	1915	大正4年5月1日	少女世界	10巻5号	行く水 二	美知代女		目次は「少女小説 ゆく水」
140	1915	大正4年5月1日	ニコニコ	52	不思議な女達	美知代	2	

141	1915	大正4年6月1日	少女世界	10巻6号	行く水 三	美知代女	3	目次は「少女小説 ゆく水」
142	1915	大正4年7月1日	少女世界	10巻7号	行く水 (四)	美知代女	3	目次は「少女小説 ゆく水」美知代女
143	1915	大正4年8月1日	少女世界	10巻8号	行く水 (五)	永代美知代		目次は「少女小説 ゆく水」
144	1915	大正4年8月1日	ニコニコ	55	廿歳で眼の開た令嬢の初めて見た世界	永代美知代		
145	1915	大正4年9月1日	ニコニコ	56	顔から生れた十億弗	永代美知代		
146	1915	大正4年9月1日	新潮	23巻3号	「蒲団」、「緑」及び私	永代美知代	1	目次は「蒲団」「緑」及び私
147	1915	大正4年10月1日	女の世界	1巻6号	小説 二人の家	永代美知代	1	
148	1915	大正4年10月15日	女の世界	1巻7号	平氏の恋と源氏の恋	永代美知代		定期増刊 恋物語
149	1915	大正4年12月	希望		秋立つころ	永代美知代	1	未確認
150	1916	大正5年1月	希望		秋立つ頃	永代美知代	1	未確認、「前号の続き」
151	1916	大正5年1月	女子の友		縁談			未確認、大2「婦人評論」にも掲載
152	1916	大正5年1月1日	女の世界	2巻1号	当世浮世風呂女湯の巻	永代美知代		
153	1916	大正5年1月1日	ニコニコ	60	今様閑語	永代美知代	3	
154	1916	大正5年2月1日	ニコニコ	61	妻より未婚のクラスメートへ	永代美知代		
155	1916	大正5年2月1日	少女画報	5年2号	姉より妹に—東京の印象—	永代美知代	3	
156	1916	大正5年3月1日	少女世界	11巻3号	梅日和	永代美知代		目次は「少女小説 梅日和」
157	1916	大正5年5月26日	婦女新聞	836	愛の欠乏は婦人をヒステリイにする	永代みち代		目次は「愛の欠乏とヒステリイ」
158	1916	大正5年6月1日	幼年世界	6巻6号	チビ太郎の冒険	永代美知代		目次は「永代美智代チビ太郎 (お伽噺)」
159	1916	大正5年6月16日	婦女新聞	839	短篇小説 母一人子一人	永代美知代		(上)
160	1916	大正5年6月23日	婦女新聞	840	短篇小説 母一人子一人	永代美知代		(下)
161	1916	大正5年7月1日	少女世界	11巻7号	長い指 短い指	永代美知代		目次は「少女小説 長い指 短い指」
162	1916	大正5年7月1日	ニコニコ	66	夏と家庭	永代美知代	2	
163	1916	大正5年7月14日	婦女新聞	843	短編小説 電報	永代美知代		(上)
164	1916	大正5年7月21日	婦女新聞	844	短編小説 電報	永代美知代		(下)
165	1916	大正5年8月11日	婦女新聞	847	少女小説 帰省の日	永代美知代		目次は「帰省の日 (少女小説)」
166	1916	大正5年9月1日	少女世界	11巻9号	私の最も感動した事 仲間はずれの少女	永代美知代		目次は「私の最も感動した事」
167	1916	大正5年10月1日	少女世界	11巻10号	歴史物語 信行の侍女 (上)	永代美知代	2	
168	1916	大正5年10月20日	婦女新聞	857	小説 秋晴の日 (上)	永代美知代		△
169	1916	大正5年10月27日	婦女新聞	858	小説 秋晴の日 (下)	永代美知代		目次は「秋晴れの日 (小説)」
170	1916	大正5年11月1日	少女世界	11巻11号	歴史物語 信行の侍女 (下)	永代美知代		
171	1916	大正5年12月1日	少年倶楽部	3巻12号	大岡裁判 皮剥獄門	永代美知代	2	
172	1917	大正6年3月1日	ニコニコ	74	仲人になつて	永代美知代		
173	1917	大正6年3月1日	少女世界	12巻3号	雛祭を待ちつゝ	永代美知代		
174	1917	大正6年4月1日	ニコニコ	75	素人書画会を観る	永代美知代	2	目次は「素人書画会を見る」
175	1917	大正6年6月1日	ニコニコ	77	愛と鼻	永代美知代	2	
176	1917	大正6年9月7日	婦女新聞	903	小品 理想の美人	永代美千代		上
177	1917	大正6年9月14日	婦女新聞	904	小品 理想の美人	永代美知代		下、目次は「理想の美人」
178	1917	大正6年11月1日	少女世界	12巻12号	冒険奇談 少女島(一)	永代美知代		目次は「冒険小説 少女島」
179	1917	大正6年12月1日	少女世界	12巻13号	冒険奇談 少女島(二)	永代美知代		目次は「冒険奇談 少女島」

180	1918	大正7年1月1日	少女世界	13巻1号	冒険奇談 少女島(三)	永代美知代	3	目次は「冒険奇談 少女島」
181	1918	大正7年2月1日	少女世界	13巻2号	冒険奇談 少女島(四)	永代美知代	3	目次は「冒険奇談 少女島」
182	1918	大正7年3月1日	少女世界	13巻3号	冒険奇談 少女島(五)	永代美知代		目次は「冒険奇談 少女島」
183	1918	大正7年8月1日	家庭及学校	3巻2号	趣味の旅行	永代美知代		末尾に(以下次号)
184	1918	大正7年10月1日	少女世界	13巻10号	山の物語 角のある人 一	永代美知代		目次は「角のある人」
185	1918	大正7年11月1日	少女世界	13巻11号	山の物語 角のある人 二	永代美知代		
186	1918	大正7年12月1日	少女世界	13巻12号	山の物語 角のある人 (三)	永代美知代	3	目次は「角のある人」
187	1919	大正8年5月1日	新家庭	4巻5号	家庭童話 青い鳥の巣	永代美智子	3	
188	1919	大正8年6月1日	新家庭	4巻6号	家庭童話 三熊さん	永代美知代		
189	1919	大正8年9月1日	夢の世界	2巻9号	蛇物語	永代美知代	2	
190	1919	大正8年10月1日	新家庭	4巻10号	三つのお話	永代美知代		目次は「家庭童話 三つのお話」「永代みちよ」
191	1919	大正8年11月1日	ニコニコ	101	寄せ切れ買ひに……	永代美知代	2	
192	1920	大正9年2月1日	少女世界	15巻2号	美枝ちゃん的眼	永代美知代		
193	1920	大正9年3月1日	新家庭	5巻3号	西洋お伽譚 春の小人	永代美知子		目次は「西洋童話 春の小人」「永代美知代」
194	1920	大正9年4月1日	新家庭	5巻4号	怪訝なローレンの瞳	永代美知代	3	目次は「怪訝なローレンの瞳」。前号「春の小人」の続き
195	1921	大正10年3月1日	婦人倶楽部	2巻3号	(初めて母となりし時の感想)	永代美知代		アンケート
196	1921	大正10年4月17日	時事漫画	10	春子さんと海狸	永代美知代		時事新報社「日曜画報」
197	1921	大正10年6月1日	女の世界	7巻6号	良人が若し不品行をしたなら……?	永代美知代		男女品行問題号、肩書は「新聞及新聞記者主幹永代静雄氏夫人」
198	1921	大正10年6月1日	少女世界	16巻6号	(二) クリームパン	永代美知代		「たのしい遠足の日」の総題で、三人の分担執筆
199	1921	大正10年7月17日	時事漫画	23	啄木鳥と幸男さん	永代美知代		
200	1921	大正10年8月1日	女の世界	7巻8号	愛無き者に依つて醸せる悲劇	永代美知代		浜田栄子問題真相号、目次は「永代美智代」
201	1922	大正11年4月1日	令女界	1巻1号	童話 緋桃の精	美知代		
202	1922	大正11年5月1日	令女界	1巻2号	少女小説 孤独	美知代		
203	1923	大正12年4月1日	婦人公論	8年4号	われらは飢ゑてゐる(今日我等女性が一番何を痛切に要求するか)	永代美知代		
204	1923	大正12年8月12日	時事漫画	128	笑ひの室	永代美知代		
205	1924	大正13年5月1日	女性	5巻5号	棄権	永代美知代		「総選挙に誰れを選ぶか?」の解答者24名の一人
206	1924	大正13年7月	復習と受験		童話 裁判の鐘	永代美知代	3	未確認
207	1924	大正13年9月1日	少女世界	19巻9号	少女物語 誕生日の贈物	永代美知代	3	
208	1958	昭和33年7月1日	婦人朝日	13巻7号	手記 花袋の「蒲団」と私	永代美知代		【日本文学研究資料叢書 自然主義】に再録
209	1958	昭和33年10月1日	みどり	1巻5号	手記 私は「蒲団」のモデルだった	永代美知代		(學燈社)

II-2 新聞雑誌掲載作品(掲載誌・時期未詳)

1		女学の友		東京で(一)	永代美知代	1	女学文壇
2		女学の友		東京で(二)	永代美知代	1	
3		女学の友		東京で(三)	永代美知代	1	
4		女学の友		東京で(四)	永代美知代	1	
5		女学の友		東京で(五)	永代美知代	1	
6		女学の友		東京で(六)	永代美知代	1	

7		女学の友		東京で (七)	永代美知代	1	
8		女学の友		東京で (八)	永代美知代	1	
9		女学の友		東京で (九)	永代美知代	1	
10		女学の友		東京で (十)	永代美知代	1	
11		女学の友		三人姉妹 (一)	永代美知子	1	
12		女学の友		三人姉妹 (二)	永代美知代	1	
13		女学の友		三人姉妹 (三)	永代美知代	1	
14		女学の友		三人姉妹 (四)	永代美知代	1	
15		女学の友		三人姉妹 (五)	永代美知代	1	
16		女学の友		三人姉妹 (六)	永代美知代	1	
17		女学の友		三人姉妹 (七)	永代美知代	1	
18		女学の友		三人姉妹 (八)	永代美知代	1	
19		女学の友		三人姉妹 (九)	永代美知代	1	
20			4号	少女小説 大火の後	永代美知代	3	
21				アルフォンス・ドウデー	永代美知代	2	
22				少女スケッチ	永代美知代	2	
25				三人の家			

### Ⅲ 生前未発表原稿 (執筆時期未詳)

1	明治40年9月執筆			小夜子			花袋文学館蔵、「蒲団」をめぐる書簡集に翻刻
2				愛憎	50枚		花袋文学館蔵、「ある女の手紙」(『スバル』明43.9)の改作
3				野獣	20枚		上下資料館蔵、「一銭銅貨」(『中央公論』明43.12)の改作
4				あの頃の人たち	20枚		上下資料館・花袋文学館の2種類、「同窓の人々」(『婦人評論』大2.6)の改作
5				猫の兎同様	25枚		花袋文学館蔵、「出戻りさん」(『婦人評論』大2.11)の改作、翻刻 宮内俊介『花袋記念館研究紀要』11
6				嫁姑	20枚		上下資料館蔵、「二人の家」(『女の世界』大4.10)の改作(2種類)
7				女学生の恋物語	30枚		花袋文学館蔵、「秋立つころ」(『希望』大4.12~5.1)の改作、翻刻 宮内俊介『花袋記念館研究紀要』12
8				はしがき	2枚		上下資料館蔵
9				瑞穂とその周辺	43枚		花袋文学館蔵
10				デッカシヨ	100枚		上下資料館蔵
11	昭和33年執筆			国木田独歩のおのぶさん	50枚		上下資料館蔵、翻刻 有元伸子『内海文化研究紀要』40
12	昭和34年執筆			云い得ぬ秘密	25枚		上下資料館蔵、翻刻 ①宮内俊介『花袋記念館研究紀要』10 ②原博巳『岡田美知代の素顔』

(注)

- (1) 旧字体は新字体に改めた。
- (2) 「上下町」欄は、上下歴史文化資料館編『岡田(永代)美知代作品集』①~③に掲載された作品で、数字は掲載巻。
- (3) 「備考」欄……「△」は、目次に作品名・作家名が掲載されていない作品。  
「\*」は、本文が掲載されず、講評によって雑誌に投稿した事実のみが知られるもの。  
「花袋文学館」は館林市田山花袋記念文学館所蔵、「上下資料館」は広島県府中市上下歴史文化資料館所蔵

(参考文献)

- ・上下歴史文化資料館編『岡田（永代）美知代作品集』①②③（私家版）
- ・守本祐子「岡田美知代投稿作品」「岡田美知代の作品」（私家版）
- ・清田啓子「資料紹介 花袋「縁」中の一モデルの証言」『駒沢短大国文』10、1980年3月
- ・小林一郎「年譜篇」『田山花袋研究一年譜・索引篇』桜楓社、1984年
- ・『田山花袋記念館研究叢書第二巻 『蒲団』をめぐる書簡集』館林市、1993年
- ・原博巳「岡田美知代の素顔―田山花袋「蒲団」のモデル」『梔葉』VI、1998年7月
- ・原博巳「第7章第二節 晩年を庄原で過ごした女流文学者岡田美知代」『庄原市の歴史 通史編』庄原市、2005年
- ・大西小生「『アリス物語』『黒姫物語』とその周辺」ネガ！スタジオ、2007年  
※大西氏からは、私信でもご教示いただいた。
- ・宇田川昭子「〔資料ノート〕岡田美知代の知られざる同人活動」『花袋研究学会々誌』26、2008年3月
- ・小谷野敦「岡田美知代と花袋「蒲団」について」『日本研究』38、2008年9月
- ・吉川豊子「永代美知代」・守本祐子「略年譜」『〔新編〕日本女性文学全集 第三巻』葎柿堂、2011年